

[原著論文：査読付]

## 上海海洋大学における日本語教育の現状と課題 ——基礎段階の教育実践を中心に——

張 傑<sup>1)</sup>，山本 洋一<sup>2)</sup>，沙 秀程<sup>3)</sup>，方 如偉<sup>4)</sup>

### The Status Quo and Issues of Japanese Education in Shanghai Ocean University —with the Focus on the Practice in the Foundation Stage—

Jie ZHANG<sup>1)</sup>，Yoichi YAMAMOTO<sup>2)</sup>，Xiucheng SHA<sup>3)</sup>，Joi HO<sup>4)</sup>

#### Abstract

The number of Japanese teachers and students in China tops in the world in 2015. Two thirds of the Japanese education in China is conducted in colleges and universities. This research explores the status quo and issues of Japanese education in China exemplified by that in Shanghai Ocean University.

Based on the background of Japanese education in China, it has studied the history of Japanese education in Shanghai Ocean University and made an analysis of curriculum setting in the foundation stage. Taking the example of the PAD (Presentation, Assimilation and Discussion) practice in the Extensive Reading, this paper has explored the teaching practice made by our teachers to improve the language proficiency of the students. It has also introduced one of our features—a variety of international exchange. The inadequacy has been illustrated in the last part from the aspects of student-faculty ratio and our support to the students who would like to pursue overseas study. It is expected that it can provide some reference to the Japanese education in universities of sciences and engineering in China for those Japanese educators and educators.

**KEY WORDS** : Universities, Japanese education, PAD, international exchange

---

1) 上海海洋大学外国語学院  
2) 九州共立大学経済学部  
3) 九州共立大学共通教育センター  
4) 九州女子大学共通教育機構

1) Shanghai Ocean University  
2) Kyushu Kyoritsu University  
3) Kyushu Kyoritsu University  
4) Kyushu Womens University

## はじめに

日中両国は一衣帯水の隣国で、古くから交流が盛んであった。20世紀の50・60年代には、日中両国の国交がまだ回復していないにもかかわらず、中国ではすでに日本語教育が行われていた。そうしたなか、1972年に日中両国が『日中共同声明』を発表し国交を結んでからは、中国における日本語教育は徐々に盛んになっていった。国際交流基金が2015年度に行った調査によると、同年中国における日本語教育機関数は2115で、世界で第三位を占めていた。そして、教師数と学習者数はそれぞれ18312人と953283人で、両方とも全世界で一位を独占していた。

また、国際交流基金が2012年度に行った調査でも、中国では大学において日本語を学ぶ者が圧倒的に多く、日本語学習者全体の64.4パーセントを占めていた。そうした状況を踏まえ、本研究では上海海洋大学日本語学部を例として、中国国内の日本語教育の現状と問題についてみていきたい。

### 1. 上海海洋大学における日本語教育の沿革

上海海洋大学の前身は1912年に設立された江蘇省立水産学校である。その後1952年に「上海水産学院」、1985年には「上海水産大学」、そして2008年に現在の「上海海洋大学」と、時代と共に校名を変えてはきたが、実に115年の長きに渡って教育研究の中樞を担ってきた歴史ある大学である。設立以来、本学は水産分野においては日本の学界とは密接な関係を築いてきた。例えば、初代学長の張鏐（在任期間1912-1925年）は、かつて日本農林省東京水産講習所で水産関係学問の研鑽を積んだ人物である。そして、50年代には数多くの教師が日本に留学し、専門分野の研究を行っていた。このように、本学は水産や海洋や食品分野の学科を主軸にしている理工系の大学であるが、日本語教育の始まりは1950年代に遡ることができる。本章では中国全体における日本語教育の事情と関連させながら、成長期・発展期・転換期に分けて本学の日本語教育の沿革を見ていきたい。

#### 1.1 成長期（1950年代—1992年）

1949年の中華人民共和国成立後、日中両国がまだ敵対関係にあったために、当時の日本語学習者は極めて少なく、日本語教育は主として北京大学と軍委工程学校（解放軍外語学院の前身）で行われていた。

1952年に日中両国の民間貿易団体の努力のもとで、両国にとって初めての民間貿易協定が調印され、民間貿易が回復した。これが契機となり日本語教育が徐々に発展していくことになる。特に1978年『日中平和友好条約』が締結された後、日本語教育が初めてのブームを迎えた。時代の要請に応じて、本学も1950年代に日本語教育を始めたわけであるが、当時はまだ日本語学部が存在せず、主として全学の学生に向けて第二外国語としての日本語の授業を設けるにとどまっていた。

#### 1.2 発展期（1993年—2012年）

中国においては1978年に始まった「改革開放」の成果が90年代に入ってから現れはじめ、経済が高度成長期に入り対外貿易が空前の盛況を迎えた。日々高まってきた日本語能力を有する人材の需要に合わせて、大学における日本語教育は著しい発展を遂げた。統計によると、20世紀末までに、中国には大学と専門学校がそれぞれ1064校と1200校あったが、そのなかで日本語学部を設置した学校は580校にものぼっていたのである。

こうした時代の流れに乗って、上海海洋大学の日本語教育も、単なる第二外国語としての日本語教育から専攻語としての日本語教育へと発展していくことになる。1993年に日本語学部が成立し、専科（短大コース）としてクラスを一つ設けた。2000年には日本語学科は専科生教育から学部学生教育に昇進し、既存の一つの専科生クラスのほかに、学部学生を対象とするクラスを二つ設けた。2003年には、さらに四クラスに拡大し、定員を徐々に増やし、2012年まではほぼ120人台の学習者を有していた。

#### 1.3 転換期（2013年から—現在）

既に1970年代に、ある島の領有権をめぐる日中両国間には摩擦が起こり始めていたが、2012年以降それが深刻化していった。そして残念ながら、こうした状況下で両国国民の溝もさらに深まっていくことになる。例えば、2005年より毎年日中両国で世論調査を行ってきた言論NPOが2015年に実施した「第11回日中共同世論調査」によると、日本に対する中国人の印象は2013年には最悪を記録するまでになってしまった。

また、上海市教育委員会が2012年以降毎年四月頃に発表している「予警專業リスト」からも、中国における日本への印象の悪化の現状が読み取れる。ちなみ

に「予警専業」とは、各大学において設置率は高いものの第一志願率と就職率が過去三年間継続的に低迷している専攻のことである。2013年には「予警専業」には15科目があげられたが、日本語はその中の一つだった。もともと各大学が専攻設置をより合理的に進められるよう発表されている「予警専業リスト」であるが、受験者の専攻選択にも大きな影響を与えたことは想像に難くない。

以上のような要因を背景に、2013年には上海海洋大学における日本語教育も転換期を迎えた。2012年まで120人台の新入生は2013年から徐々に減少し、2016年にはついに100人を割り、結果的にクラス数も三つに減少することとなった。

## 2. 基礎段階におけるカリキュラム

上述のように、2013年から新生の人数が大幅に減少したが、新生の第一志願率も喜ばしいものではない。例えば2016年は新生の人数が大幅に減少したことにより第一志願率が例年より上がったが、それでも64.81%にとどまっていた。第一志願率の低迷は新生の勉学意欲の低さに繋がっていて、現在本学部には「無関心・無感動・無気力」の学生が少なくない。さらに、近年では日本語学部の卒業生の就職率も80%未満にとどまっており、憂慮すべき状況にある。

日本語学習のブームが少しずつ冷めてきた現在、いかに学生の学習動機をつけ、就職のニーズに合わせて、いままでの知識偏重の日本語教育から総合能力の養成を目標とする日本語教育へと転換するかは、本学日本語学部の教師のみならず、恐らくすべての日本語教師が直面している重大な課題になっているだろう。本章ではまず基礎段階におけるカリキュラムについて紹介していきたい。

日本語学部の新生のほとんどがゼロからの日本語学習者なので、基礎段階では学生に語彙力、文法力、読解力などを身につけてもらうことが最も重要視されている。この段階では、一番ウェートを占めているのは学科基礎科目の「基礎日本語」で、授業は四学期に渡り週に四コマずつある。またこの「基礎日本語」とセットになっている授業として、「基礎日本語演習」という演習科目がある。これは学生に「基礎日本語」の授業で学んだ内容を活かし演習してもらう授業で、週に一コマ開講されている。

必修専攻科目としては日本語会話、聴解、読解と作文の授業がある。「日語読解」と「日本作文」は二年

生向けの授業であるが、「日本会話」と「日本聴解」の授業は四学期に渡って開講されている。ただし、日本語学部の学生のほとんどは日本語学習の未経験者なので、会話と聴解の授業は第一学期の後半から始まることになっている。

表1. 上海海洋大学日本語学部基礎段階におけるカリキュラム (括弧内は単位数)

学期	学科基礎課(必修) <学科基礎科目>	专业课(必修) <必修専攻科目>				专业课(选修) <選択専攻科目>	実践実 訓課 (必修) <演習 科目>
		日語聴解	日語会話	日語読解	日語作文		
第一 学期	専業 導論 (1)	日語 聴解 1 (1)	日語 会話 1 (1)				基礎 日本語 演習 1 (1)
	基礎 日本語 1 (8)						
第二 学期	基礎 日本語 2 (8)	日語 聴解 2 (2)	日語 会話 2 (2)				基礎 日本語 演習 2 (1)
短学 期1							聴解 会話 テク ニック 訓練 (1)
第三 学期	基礎 日本語 3 (8)	日語 聴解 3 (2)	日語 会話 3 (2)	日語 読解 1 (2)	日語 作文 1 (2)	日本語 情報 処理 (1)	基礎 日本語 演習 3 (1)
第四 学期	基礎 日本語 4 (8)	日語 聴解 4 (2)	日語 会話 3 (2)	日語 読解 2 (2)	日語 作文 2 (2)		基礎 日本語 演習 4 (1)
							専業 総合 訓練 (1)
短学 期2							専業 調査 (1)

単なる言語的知識の伝授だけでなく、学生の言語運用能力を向上させるために、本学では「基礎日本語演習」のほかに「聴解会話テクニック訓練」・「専業総合

訓練」・「専門調査」という三つの演習科目が設置されている。「聴解会話テクニック訓練」は、音声を消した日本の映画やドラマの映像に合わせて学生たちが日本語の台詞を話す「吹き替え」などの実践的な訓練を通して学生の聴解力と会話を向上させることを目的としており、「専門総合訓練」は学生が中国教育部の主催する「専門日本語能力試験」に合格できるようにサポートする授業として、主に試験対策を講じている。また「専門調査」は二年生向けの授業で、学生に明確な問題意識を持ちながら一つのテーマについて調査してもらう授業である。

### 3. 指導の実態

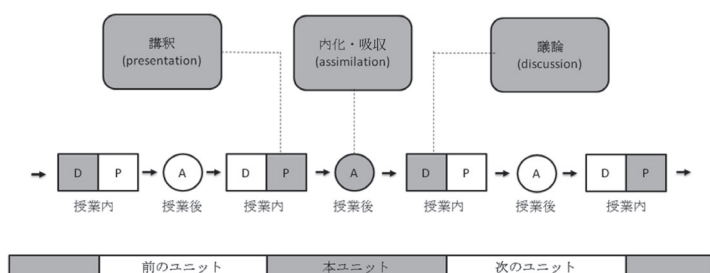
21世紀が情報化社会だと言われているように、その中で育ってきた現在の大学生はインターネットの世界に馴染んでいて、学校の授業に対してはいささか消極的な傾向を示している。そこで、学生の積極性を引き出すために、学校と教師はさまざまな工夫を試みている。本章では筆者が担当している「日本語読解」の授業を例として、日本語学部の指導の実態を紹介していきたい。

読解の授業は中国語で「汎読」と呼ばれ、学生により多くの文章を読んで理解してもらうのが目的とされている。本学では、「日本語読解」は二年生向けの授業なので、受講者はすでにある程度の文法力、読解力と語彙力を身に付けている。それゆえ、学生の能力を活かし、自主的な学習を促すために一つの試みとして、「対分授業」(PAD)の教授法を取っている。

#### 3.1 「対分授業」(PAD)について

「対分授業」(Presentation—Assimilation—Discussion以下PAD教授法)は上海復旦大学張学新教授が考案した教授法で、表2で示されるような流れで授業が構築されている。

表2. PAD教授法の流れ



総じて言えば、授業の半分は教師による講釈 (Presentation) で、半分は学生によるディスカッション (Discussion) である。伝統的な教授法と同じように、まずは教師による講釈で始まり、その後は学生による知識の内化と吸収 (Assimilation) が行われる。一方、ディスカッションを重視した学習者参加型授業と同じように、PAD教授法は学生同士のコミュニケーションと学生・教師間のコミュニケーションを重視し、学生の自主的な学びを促している。PAD教授法のキーポイントは教師の講釈と学生のディスカッションの間に一定の時間を置いて、学生の自主的学習に供する点にある。

#### 3.2 PAD教授法による読解授業

ここで前期第三課「習慣とマナー」を例として、PAD教授法による読解授業の実践を紹介しておきたい。「習慣とマナー」は、サトウ サンペイが『日本語教育通信 第26号』に発表した文章で、中国、日本、韓国などの国の習慣とマナーの違いについて紹介したものである。

##### STEP1 講釈 (Presentation)

読解の授業なので、教師はこのステップでは、主として次回勉強する文章のなかにある難解な言葉や文法について説明することになっている。第三課の場合、教師は主として「まい」、「ばすむ」、「てほしい」、「てはかなわない」という四つの表現を取り上げて文法的に解釈する。そしてマインドマップを使いながら、文章の流れを説明する。最後は宿題を出しておく。

##### STEP2 内化と吸収 (Assimilation)

一回目の授業の後、学生は独学し宿題を完成させる。PAD教授法の成否は宿題の出し方にかかっていると一言しても過言ではない。具体的に言えばその宿題は「考考你」(Challenge)・「幫幫我」(Trouble)・「亮閃閃」(Attraction) という三つの部分からなっている。

「Challenge」の部分では主として自分はずでわかっているがクラスメートがわかっている内容を取り上げる。「Trouble」の部分では自分のわからないことを取り上げる。

この二つのパートでは学生は主として言葉や文法に注目している。第三課の場合、よく取り上げられているのは「韓国の女性は座るとき、片膝を立てる。私はとても美しいと思

うが、両膝をそろえて座る習慣の日本女性はイヤな顔をするだろうし、韓国女性は正座がいいとは思うまい」という段落である。

「Attraction」の部分では学生は自分にとって一番印象深い内容や深い感銘を受けた内容を文章から抜粋する。あるいは自分が興味を持っていることに関してさらに資料を調べたりする。第三課の場合、学生たちは日本の飲酒習慣や上海の食事習慣やチベットの独特の習慣などに関していろいろ調べた。

### STEP 3 議論 (Discussion)

二回目の授業の前半で、学生はまずグループを作って、宿題に基づきながらグループ活動を行う。具体的に言えば、自分がわかっている内容について仲間を確認したり、自分のわからない内容について仲間から教えてもらったりする。そして、独学の中で印象深い内容や自分の調べた関連知識を仲間と共有する。グループ活動を行う際、グループの作り方も重要である。読解授業の中では、新鮮感と緊張感を生み出すために、毎回トランプカードを使って四人毎にグループを作る方法をとっている。

グループ活動の後、さらに随意的に一人か二人を指名し、グループの代表者としてクラスで発表してもらう。この際、発表者は主としてグループで解決できなかった問題を提示し、クラス全体で解決を図る。そして、自分たちが調べた内容をクラス全員に紹介する。実際の授業の中で、二人の発表者がそれぞれチベットの習慣と広州のヤミ茶について発表したの、学生だけでなく教師もよい刺激を受けた。学生の発表の後、フィードバックとして教師は学生の発表についてコメントしたり、足りないところを補足したりしてから、学生と一緒に教科書にある練習問題をやる。

### 3.3 学生による授業評価

筆者は2016年の秋学期（二年生の前期）の読解授業にPAD教授法を取り入れたが、最後の講義で受講者52名を対象にアンケート調査を行った。アンケート調査の内容は、教師の講釈、学生の議論、宿題および授業に対する全体的評価という四点に渡っているが、ここでは「全体的評価」という項目だけを取り上げてみよう。

アンケート調査の結果から見れば、一学期の授業を通して、PAD教授法が九割弱の学生に認められた一方、教師の講釈と学生の議論のバランスなどの面においては調整する必要があることも読み取れる。

表3 読解授業の受講者（52名）を対象とするアンケート調査

	項目	選択人数	比率
PAD 授業法 の効果 (複数 選択)	学生が自ら進んで勉強するようになった。	36	69%
	学生同士および学生と教師の交流が多くなって、授業の雰囲気明るくなった。	24	46%
	学生の協働学習を促し、学生のチームワークの精神を育てた。	38	73%
	教師の講釈が少なく、教師としての役割が十分果たされていなかった。	6	12%
	学生の負担が多くなった。	6	12%
PAD 授業法 に対する 総合 評価 (単一 選択)	伝統的な教授法のほうがずっと良い。	0	0
	伝統的な教授法のほうがより良い。	6	11%
	どちらとも言えない。	24	46%
	PAD教授法のほうがより良い。	18	35%
	PAD教授法のほうがずっと良い。	4	8%

以上はPAD教授法とそれを取り入れた読解授業の実践の紹介だが、実は学生の自主的な学習を促すために、日本語学部の教師たちはPAD教授法のほかにタスク、ポートフォリオ、反転授業などの教授法も積極的に授業に取り入れている。また、クラスサイズの面においても様々な工夫を試みている。会話の授業の効果を上げるために、現存のクラスをさらに二つに分けて少人数授業を行っているのもそのひとつである。

## 4. 国際交流活動

グローバル社会では国際的視野を持つグローバル人材のニーズが高まってきたが、それに応じて日本語学部も国際交流活動に積極的に取り組んできた。2004年11月に本学と日本九州女子大学との間に『上海水産大学と九州女子大学交流協定書』が締結されたが、それを皮切りに国際交流活動が盛んに行われてきて、現在では日本語学部を代表する特色の一つにもなっている。

### 4.1 協定校との連携

2004年以来、上海海洋大学日本語学部は九州共立大学・九州女子大学などの大学と様々な形で連携を取ってきた。

まずは編入生の派遣である。前述のように2004年

九州女子大学と協定書を締結したが、それに次いで2005年と2009年にそれぞれ九州共立大学と活水女子大学と協定を結んで、編入生派遣に関して合意を取り付けた。そして2004年から2016年までに編入生として三つの協定校に留学した学生は、すでに230人に達している。

編入生だけでなく、2009年から日本語学部は交換留学生として九州女子大学・三重大学・高知大学などに学生を派遣している。留学の期間は半年間か一年間である。2009年から2016年までに交換留学生として日本で学んだ学生は40名近くに達している。

上述の二つは主として在学者向けのプロジェクトであるが、2010年からは卒業生向けのプロジェクトも発足した。2010年上海海洋大学は桜美林大学と協定書を締結し、本学の優秀な学部生が卒業後ただちに桜美林大学大学院に進学することに関して合意を取り付けた。今まですでに数名の卒業生がこの形で桜美林大学の大学院に留学している。

#### 4.2 文化体験プログラム

2014年から毎年夏休み期間中に十数名の学生が日本での文化体験プログラムに参加している。毎年の研修先は固定されていないが、学生に日本文化を体験しながら日本語能力を高め日本文化をより深く理解してもらうという趣旨には変わりはない。まず2015年のプログラムを例として文化体験プログラムを紹介しておくたい。

2015年に広島国際プラザと協力しながら実現した文化体験プログラムのなかには日本語授業のほか、原爆資料館の見学や宮島訪問やホームビジットなどの文化体験も入っていた。十日間に渡ったプログラムを通して、学生たちは日本人の真面目さと熱心さを実感しただけでなく、戦争の恐ろしさと平和のありがたさを改めて認識することができた。

2015年までは主として本学の学生を日本に送るだけであったが、2016年に入ってようやくその局面を打開し、日本の大学から学生を迎えることができた。8月下旬に九州共立大学の学生は本学が主催した文化体験プログラムに参加し、本学日本語学部の学生もスタッフとして同プログラムに参加した。一週間に渡ったプログラムがきっかけで、両国の学生が様々な分野において交流し、相互理解を深めることができた。日本の学生は今回の研修を通して日中両国の文化の違いを感じただけでなく、日本のメディアによって作られた中国像と本当の中国の違いも実感したと語っていた。

一方、中国の学生も今回の研修からよい刺激を受けたようだ。

多様な国際交流活動を通じて、学生の国際的視野と国際コミュニケーション能力を育成し、大学の国際競争力を向上することができたので、日本語学部はこれからも国際交流活動を推進していきたい。

### 5. 問題点と課題

1993年に日本語学部が設立されて以来、教師達が絶えず積極的にカリキュラムと教授法を改善することで、日本語学部は大きな発展を遂げてきたが、現在の日本語教育にまったく問題点がないというわけではない。

#### 5.1 学生・教員数比

高等教育の水準を判断するには、学生・教員数比（ST比）が一つの重要な指標とされている。ST比が高ければ、教師の負担が多すぎることになる。莫大の時間が授業にのみ費やされ、研究や本人の資質向上のための時間が確保されなくなってしまう。中国教育部が2004年に発表した『普通高等院校基本办学条件指標』のなかでは、ST比の上限は18と決められている。

ところが、日本語学部ではST比はすでにこの基準を超えてしまっていると言わざるを得ない。近年、日本語学部は新人教師の募集に取り組んでいて、ST比が徐々に下がってはきたが、それでも2015年度（2015年の秋学期と2016年の春学期）のST比はやはり20.3%だった。また、教員数の中には本務者も兼任者も日本人教員も含まれているが、本務者と言っても年に一、二名程度が産産や研修によって授業担当から外れているのが現状で、実際のST比はこれよりもっと高くなる。大学側もこの問題を認識しており、教師の募集と新入生の人数の削減という二つの面から問題の解決に取り組んでいる。さらに、本務者の負担を減らすために、積極的に兼任者や日本人教員の採用を進めているところである。

#### 5.2 留学志望の学生へのサポート

前述のように本学では毎年30名程度の学生は編入生や交換留学生などの形で日本へ留学している。そうした状況のもとで、留学志望の学生へのサポートもより重要になってきた。2017年1月に上海海洋大学出身で、現在九州共立大学在学中の学生35名を対象に「中国での日本語習得状況」を巡ってアンケート調査が行

われた。アンケートには「九州共立大学の留学試験を受けるために中国の大学でどんな科目を設置してほしいですか」という項目があった。これは選択問題ではなく、学生に自由に記述してもらった形式の質問である。その答えとして、一番にあげられていたのは「日本文化」という科目である。

日本語学部では基礎段階において「日本文化」という科目が開講されておらず、教師がほかの科目の授業に文化理解を盛り込む形になっている。今回のアンケート調査の結果からみれば、留学志望の学生がうまく留学試験を受けるために、そして日本に留学に行ったら、より早く現地の生活に慣れるために日本文化に関する科目を設置するか、ほかの科目の授業で日本文化に関する解説を増やすなどして、留学志望の学生へのサポートを強めなければならない。

## おわりに

以上、本稿では上海海洋大学における日本語教育の沿革、基礎段階におけるカリキュラム、教授法および国際交流活動について考察を行ってきた。1993年に設立されて以来、日本語学部は大きく成長し、数多くの人材を育ててきた。一方、学生・教員数比や留学志望の学生へのサポートなどの面においてさまざまな問題点が存在していることも事実である。今後の課題として、上述の問題点を踏まえながら、いかにカリキュラムとシラバスの改善に取り組んで多様な教授法を教育現場に取り入れて、より効果的な日本語教育を実現していくか、研究していきたい。

## 参考文献

- 1) 中国教育部 (2004) 「普通高等院校基本办学条件指標」
- 2) 国際交流基金 (2006) 「読むことを教える (国際交流基金日本語教授法シリーズ7) ひつじ書房
- 3) 修剛 (2008) 「中国高等学校日本語教育的現状と展望 ——以專業日本語教学為中心」 日語学習と研究
- 4) 戴焯棟, 胡文仲 (2009) 「中国外語教育發展研究 (1949-2009)」 上海外語教育出版社
- 5) 言論NPO (2013) 「第九回日中共同世論調査」
- 6) 朱桂榮, 林洪, 他 (2014) 「日語協作學習理論与教学实践」 高等教育出版社
- 7) 冷麗敏 (2015) 「教師, 課堂, 学生与日語教育」 高等教育出版社
- 8) 国際交流基金 (2016) 「2015年度海外日本語教育

機関調査結果 (速報値)」

- 9) 程志燕 (2016) 「新中国日語教育的歷史与現實」 理論与現代化 第五号
- 10) 張学新 (2017) 「対分課堂: 中国教育的智慧」 科学出版社

Received date 2017年5月29日

Accepted date 2017年7月10日